



TITLE:

平安鎌倉時代和歌集の研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

山下, 文

CITATION:

山下, 文. 平安鎌倉時代和歌集の研究. 京都大学, 2015, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18707>

RIGHT:

京都大学	博士（ 文学 ）	氏名	山下 文
論文題目	平安鎌倉時代和歌集の研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本博士論文「平安鎌倉時代和歌集の研究」は和歌集における「異本」の意味を明らかにしようとするものである。</p> <p>研究に当たっては、各伝本を比較することを手がかりにして、各伝本の間に見られる類似点と相違点を精査するという方法を採用。これは、古典文学の研究に際して広く用いられてきた手法である。中でも、異なる性格を持つ複数の伝本を比較し系統的に分類することは、文学研究の基礎研究にあたるもので、研究方法として古くから用いられてきた。和歌文学研究においても、新編国歌大観・新編私家集大成の出版により多くのテキストが紹介され、影印本が数多く印行され、様々な注釈書が著され、現在の和歌文学研究は諸本を系統立てて分類するという段階を離れたと言われることさえある。</p> <p>しかし、本当にそう言えるのだろうか。冷泉家時雨亭叢書の刊行によって、これまでの系統分類に当てはめられない和歌集の伝本が数多く明らかになっている。例えば、冷泉家時雨亭叢書「平安私家集七」所収の唐草装飾本私家集諸本などである。また、以前から知られていた伝本であっても、異同が多く、他の諸本とのつながりがほとんど見出されないため、「異本系統」として片付けられてきたものもある。例えば、天理図書館善本叢書「平安諸家集」所収の定家筆『実方集』などである。このような従来の分類方法によって説明できない伝本が、多く存在しているのである。</p> <p>これは、従来の和歌文学研究が現存する伝本に基づいておこなわれてきたためと言えるだろう。現存する伝本は比較的新しい時代に書写・出版されたものが多い。また、諸本を見比べるのに時代的に近いものの方が比較的簡単である。このようなことから、諸本を系統立てて分類するといっても、繰り返し転写され広く流布し、現代にまで伝わった伝本（ここではこれを「流布本」と称する）を中心に据えることになってしまう。例えば、三十六人集について言うなら、近世に出版され広く読まれた正保版歌仙家集系統、平安時代に書写されて以降広く享受されてきた西本願寺本三十六人集系統などが流布本として挙げられるだろう。そのようにして導き出された系統論の中心部から、外れた伝本は「異本」系統として遇されることになる。</p> <p>そのような中、冷泉家時雨亭叢書の刊行によって、さらに多くの和歌集に「異本」が存在することが明らかになった。今こそ、あらためて基礎研究に立ち返る必要があるのではない。もちろん、先達の研究を否定するわけではない。従来の諸本論や伝本研究は、流布本を中心に据えた研究として尊重すべきである。ただ、「異本」を「異な本、変わった本」として片付けるのではなく、「異本」そのものの性格や特徴を正しく読み解くべきだと考えるのである。そもそも「異本」は、「流布本」よりも古い時代に書写されたものである場合が多い。「異本」と「流布本」は異なる時代に書写されたものであって、性格的にも異なると看做すべきだと思うのである。</p>			

第一部 「介入する書写者」

第一章 冷泉家時雨亭文庫蔵唐草装飾本『素性法師集』について

冷泉家時雨亭文庫蔵唐草装飾本『素性法師集』（以下「装飾本」）は、多様な伝本の伝わる『素性集』の中でも非常に特異である。装飾本の総歌数は四十九首で『素性集』諸本の中で最も少ない上に、配列も大きく異なっている。また、装飾本の詞書の示す詠歌事情までも独特である。このような装飾本は、『素性集』の従来の諸本分類によると「異本」と判断されることになる。

ただ、他の『素性集』諸本との関連が見られないわけではない。装飾本と他の『素性集』諸本を比較すると、装飾本のみが持つ独自歌は一首もなく、部分的には配列の上で共通する箇所もある。このような点から、装飾本と他の『素性集』諸本との間には共通した歌原稿などがあつたと想定される。

さらに、装飾本に見られる二例の不完全な詞書はその想定を確実なものにする。一例目は「ある人にかはりてきくをやるとて」とのみあつて、本来歌がある箇所が空白になっている。二例目は「うせ給にしかば白川のわたりにおくりたてまつりし夜」と唐突にはじまり、主語に当たる部分がない。どちらも詞書として不自然・不完全で、脱落などの意図せぬ事故などに依つたものと思われる。以上から、装飾本は他系統の諸本と祖本においては共通するものの、落丁などを経て現在のような特異な形態になったと考えられる。

次に詞書についてである。他の『素性集』諸本の詞書よりも詳しいものが多いため、「後代の付加」だろうと指摘されている。しかし、他の『素性集』諸本と比較すると詞書の中には削除されたものもある。そして、付加は私的な歌に、削除は公的な場で読まれた歌に多く見られる。この特徴は、装飾本が「物語的」家集として改編されたことを示すかのようである。ただし、装飾本には、自撰家集に多い助動詞「き」が二十五例用いられるのに対し、物語的家集に多く用いられる助動詞「けり」は一例しか用いられていない。このことから、装飾本の詞書は素性の私的な歌に対して興味を抱いた二次的な享受者が、素性歌を素性自身の経験に基づいたものとして理解しようとしたために生まれたと考えられる。

第二章 天理大学附属天理図書館蔵定家筆『実方集』について

天理大学附属天理図書館蔵『実方集』（以下、「天理本」と略）は藤原定家によって書写されたもので、『実方集』諸本中最も古いものである。その上、歌数二十八首と少なく、他本には見られない歌がある、配列が大きく異なるなどの特徴がある。これまで、天理本の成立について「抜粋」か「再構成」かと論じられてきたが、未だ明確な答えは出ていない。

天理本と他の『実方集』諸本との共通点として、八首の共通歌が挙げられる。その中の一首、14 番歌の詞書に「おなじはる、あはたどのにて（=同じ年の春に粟田殿で詠まれた歌である）」とある。この詞書は他の『実方集』と共通する上に、贈答歌の中の一部であることから、天理本と他の『実方集』諸本には共通する歌原稿などがあつたと想定される。

天理本の特異な点として実方の歌が少ないことがある。他人詠は九首、誰の歌とも判別できないものが四首も存在する。ただ、他人詠とはいえ藤原済時・藤原朝光の後室などと

いった、実方の周辺の人物がその大部分を占める。さらに、天理本に見られる「みかさやま」「との」という表現に着目することで、天理本は近衛府の顯官にあって「殿」と呼ばれるに相応しい人物——すなわち実方の養父済時——の周辺で編まれたものであることが明らかになる。

天理本は実方の名を冠した私家集ではあるが、実方個人の交友関係だけでなく、済時や実方の属するグループに対する興味や関心を原動力にして編まれたものと考えられる。このような天理本の在り方は、集団の家集『大齋院御集』に共通する。天理本が成立した背景には多様な家集が生み出されていた当時の文化的背景が深く関わっていると思われる。

第三章 冷泉家時雨亭文庫蔵坊門局筆本私家集について

坊門局筆本私家集（冷泉家時雨亭叢書『平安私家集三』所収）は、藤原定家の識語によって確かに坊門局が書写したものと認定される私家集群である。藤原俊成が女の坊門局に書写させたもので、後に藤原定家の手に渡ったと考えられており、本文中に俊成・定家・坊門局による書き入れが見られる。

中でも坊門局筆本『兼盛集』（合計一六〇首）には多様な坊門局の書き入れが見出される。坊門局の書き入れのうち、特にママ注記と異本注記に着目する。ママ注記は「本」「本のまゝ」などと右脇に記すもので、合計十二箇所に見られる。例えば 76 番歌の下句「いくよがさねのちどりなるらん」は、明らかに「ちどり」ではなく「ちとせ」とあるべきところで、親本の誤写と見るほかない。このような明らかな誤りであってもママ注記を付すに止めている。坊門局筆本が親本の本文を極力保存しようとする腐心し書写した様子が窺われる。しかし、95 番歌を最後にママ注記は見られなくなり、変わって 99 番歌から異本注記（十二箇所）が見られるようになる。これは「異本には」「～とある本にあり」などと記した上で、親本以外の本文を書き付けたものである。すなわち、坊門局は明らかに親本の誤りと認められる箇所にママ表記を付しつつ書写を続けていたが、半ばまで写し終わった頃にはママ注記を付すだけでは不十分と感じたようである。そこで、「異本には」などと注記した上で、親本以外の伝本の本文を書き加えたものと考えられる。

坊門局も、装飾本『素性法師集』・天理本『実方集』・時雨亭文庫蔵本『古今金玉集』に介入した書写者と同様に、本文に立ち入って書き入れをおこなっている。ただし、坊門局は親本に元からある誤りだと示したり、親本にはない本文を補ったことを明示したりすることによって、親本本文への「介入者」となることを極力避け、「書写者」としての態度を貫こうとしている。坊門局は非常に客観的な校訂者としての目も持ち合わせた書写者ということができる。

坊門局筆本私家集は書写されて以降、俊成・定家の手を経て現在に到るまで冷泉家に蔵されてきた（現存する十集のうち七集が現在も冷泉家時雨亭文庫に所蔵されている）。すなわち、冷泉家の歴代当主が勅撰集を編纂する際に、坊門局筆本私家集を撰歌源として用いた可能性がある。そこで、俊成と定家がそれぞれ単独撰者として撰集に当たった『千載和歌集』と『新古今和歌集』を坊門局筆本の本文を比較したが、共通点はほとんど見られない。例えば坊門局筆本『唯心房集』（寂然）は、寂然の自筆本を元に書写したものであって、極めて信憑性の高い伝本であるにもかかわらず、俊成も定家も撰集に用いていない。俊成も定家も坊門局筆本を特に重視しているわけではないことが明らかとなる。

第四章 冷泉家時雨亭文庫蔵本『古今金玉集』の生成

冷泉家時雨亭文庫蔵『古今金玉集』（以下、「時雨亭文庫蔵本」と略）は、時雨亭文庫蔵本が冷泉家時雨亭叢書『平安中世私撰集』（朝日新聞社、一九九三年）に収められるまでは、近世に転写されたとされる高松宮家伝来禁裏本（以下、「高松宮本」と略）でもって世に知られていた。『金玉集』諸本は、甲・乙・丙本系統と分類され、それぞれが撰者である公任が試行錯誤しつつ編纂した跡を示すと考えられてきた。その中に於いて、時雨亭文庫蔵本は極めて特異な一本である。歌本文・詞書・作者表記・総歌数に到るまで、非常に多くの特徴が見出される。

これまで『金玉集』諸本と『深窓秘抄』は作者の位署と歌の出入りに基づいて、甲本系統→乙本系統→丙本系統→『深窓秘抄』の順に改編されたものと考えられてきた。時雨亭文庫蔵本の作者表記を見ると、いずれかの系統に当てはめることはできない。ただし、その作者表記は乙本系統に一致するものと、丙本系統に一致するものが見いだされることから、時雨亭文庫蔵本は乙本系統から丙本系統への過渡期にあるものと見る事が出来る。

ただし、詞書に関しては同様に考えることはできない。『金玉集』諸本の中で時雨亭文庫蔵本にのみ詞書が全くないのである。そこで参照すべきは、『深窓秘抄』である。『深窓秘抄』も詞書が全く存在せず、基本的に作者を表記するにあたっては名のみ記すという形を取っている。『深窓秘抄』は外形的に整えられたものと言える。時雨亭文庫蔵本の作者表記はこの『深窓秘抄』に非常に類似している。時雨亭文庫蔵本は作者の表記に当たってはじめて登場する人物に関しては氏と名を示し、二回目以降は名のみを示すという方針を採る。一般的に勅撰集・私撰集では、編纂時代に亡くなっている人物については極官を、存命の人物についてはその時点での官位を記す。時雨亭文庫蔵本以外の『金玉集』はこの方法に基づいた表記がなされている。時雨亭文庫蔵本の作者表記は他の『金玉集』諸本のものよりも『深窓秘抄』のものに近いと言えるだろう。このような作者の表記法は歌集を冒頭から読む場合に、機能的である。このようなことから時雨亭文庫蔵本の作者表記は、和歌集としての外形的な形を整えようとして（機能性・装飾性を高めるために）改められている可能性が非常に高いと思われる。

このようなことから、時雨亭文庫蔵本に詞書が見られない点に関しても、和歌集としての形を整えようとして削除されたと考えるべきではあるまいか。時雨亭文庫蔵本以外の『金玉集』を見ると、詞書の大部分が雑歌に偏っている。このような様子は、歌集として未精選であるかのようにも映る。時雨亭文庫蔵本はそうのように思った書写者や享受者が改編を加えることによって、現在のような特異な本文を持つに至ったと考えられる。

ここまで、第一部「介入する書写者」は、和歌集を書写する人物にスポットライトを当てて、「異本」の生成について論じてきた。第二部「苦闘する著作者」では和歌集の原著者が自分の目指すところに近づくために試行錯誤する有様を探りたいと考える。

第二部 「苦闘する著作者」

藤原公任の私撰集編纂—『金玉集』『深窓秘抄』の配列と構成から

『金玉集』と『深窓秘抄』はいずれも藤原公任が編んだ私撰集で、所収歌・部立・配列・構成に類似点が多く、『深窓秘抄』は『金玉集』の改訂版とされてきた。ここでは特に、この二つの私撰集の配列と構成に着目し、藤原公任がどのように私撰集を編んだのかを考察する。

まず、四季部と恋部の配列についてである。『深窓秘抄』『金玉集』ともに、勅撰集に準じたもので、季節の移り変わりに添った配列がなされている。ただし、『深窓秘抄』の方が、春・夏・秋・冬の景物がバランスよく盛り込まれている上に、巻頭・巻軸には季節の始まりと終わりを意識した表現を用いた歌（春部巻頭「昨日こそ年は暮れし」、春部巻軸「今日のみと春を思はぬ」）が置かれている。恋部の場合も、『深窓秘抄』の方が、より、恋の進行に従って歌が配されている。

一方、雑歌は「なだらかな繋がりが考慮されている」という指摘もあるが、一見したところ、無秩序なものとして映るため、「優れた歌が選ばれてさえいれば、事足りると考えたものと推察される」などと言われ、明確な配列はされていないと考えられてきた。しかし、雑部の歌句を詳細に見ると、『金玉集』『深窓秘抄』ともに、前後する二首のほとんどに、何らかの関連が見出される。それは「朝ぎり／朝ぼらけ」「あまの原／わたの原」「峰の松風／峰の白雲」といった単語のレベルのものから、肉親との別れを惜しむ歌、官途の不遇を嘆く歌、独り寝の寂しさを詠んだ女性の歌など、その詠歌事情が似通ったものもある。

このような配列方法は、既存の和歌集には見られないものである。公任は『金玉集』の編纂過程に、雑部の体系的な配列方法を模索し、既存の勅撰集とは異なる二首を一組にするという配列法を見出したのであろう。

二首を一組にするという特徴は、『前十五番歌合』『三十人撰』『三十六人撰』といった撰歌合に通じるものである。また、詠歌状況や歌句の細部に關心の目を向けて歌を配列するという特徴は、『新撰髓脳』の「事おほく添へくさりてやと見ゆるがいとわろきなり。一すぢにすくよかになむよむべき」という記述を思い起こさせる。『金玉集』と『深窓秘抄』のあり方は、公任の和歌集編纂過程を明らかにするだけでなく、歌論や歌学なども明らかにする鍵となるであろう。

原作者が新しいものを最初に生み出すことは、「創作」と言われる。一方、後代の享受者がもとあるものを写し取ることは、「複製」と言われる。ただ、本論文において論じてきたように、後代の享受者が「複製」する際に二次的な作者として「創作」することもある。また、どれほど心がけていても、知らず識らずのうちに書き損じてしまうこともある。「創作」と「複製」の境界は曖昧である。

複数の伝本を系統立てて整理し、どの伝本が原作者が「創作」したものなのか、どの伝本が最も優れたものなのかと、一つの真実に迫ることも重要である。ただ、それぞれの伝本に対して真摯に向き合い、何故そのような伝本が生まれたのかと問いかけることも忘れてはならないだろう。系統から外れたいわゆる「異本」も、それぞれの時代と人々の心が作り出した「創作」の一つと見ることもできるのである。

(論文審査の結果の要旨)

平安・鎌倉時代の和歌集の研究は、今日伝存する数多くの諸本を分類し、系統立てることから始められるのが常である。系統をたどることによって、歌集のより古い形を求め、終には原本の姿を髣髴たらしめるところまで遡ろうと努める。それによって始めて、歌の作者や、歌集の編者の和歌観は明らかにしうると考えてきた。和歌研究は、そのような諸本研究を基礎とした上に、久しく積み重ねられてきたのである。

しかし、多くの伝本の中には、いずれの系統にも入れようがないほどに特異な形をしたものがある。いくつかの系統の流布本とはあまりにも異なるその形態ゆえ、従来の伝本研究はそれを「異本」の一語で片付け、その歌集の意味を深く追求しない傾向があった。本論文は、そのように考えて、むしろそれらの「異本」を凝視せんことを志すのである。すなわち、古態をさぐり、原本に遡ろうとするのではなく、流れからはずれたところにある「異本」について、それを詳しく分析し、その独自な点について精密な考察を加え、それらを作った人々の編纂意図、あるいは和歌観などを明らかにしようとする。努力する。

第一章は、数多くの『素性法師集』のどれにも似ない、冷泉家時雨亭文庫蔵唐草装飾本を分析する。論者は、他の諸本との比較を試み、この装飾本には素性の私的な歌が加えられ、公的な場で詠まれた歌が削除されている特色のあることを見いだした。そして、一般に私的な歌を中心に物語的な歌集を編纂する場合は、「昔男ありけり」と言われるような助動詞「けり」を詞書の中に用いることが多いのに対して、この装飾本には自撰歌集に多く見られる助動詞「き」を使用することを明らかにした。そして、この装飾本の編者は、自らの過去の体験を語る場合に頻用する助動詞「き」を用いることにより、あたかも素性が自らの私的な出来事を振り返りつつ自歌を編纂した歌集であるかのようにこれを装ったと論じる。確実な論とするためには他の傍証も必要だが、魅力的な見方を提示した論考として高く評価されるべきものであろう。

第二章は、やはり他本に見られない内容の異本『実方集』、天理図書館蔵藤原定家筆本を取りあげる。この歌集中の詞書の人物の称呼について精緻な考証を重ねた上で、論者は、これが実方の養父済時の周辺で編纂された歌集であることを明らかにした。歌集編纂の場を具体的に追求する試みとして、これも新鮮な議論であった。

歌集の編纂は、特定の立場において、特定の興味のもとになされるのであり、いわば、歌集を受容した人々が、あらたに歌集の制作者ともなり、歌集に新たな意味を付与するのである。以上の二つの章は、歌集を作ることを深く考察することにより、「異本」研究の重要性を示したものであった。

ただ、「異本」に見られる特異な体裁のすべてについて、その意味を考えることにはさまざまな困難がともなうであろう。たとえば、第四章で取り上げられる時雨亭文庫蔵『古今金玉集』は、藤原公任の歌集『金玉集』の一伝本であるが、奇妙なことに、諸本には見られる詞書がそこには一切ない。論者は、やはり詞書のない公任編の歌集『深窓秘抄』をも類例にあげて、詞書をもたないのは、それらが詞書による情報を重視しない装飾本であったことと関係することを言う。たしかに、装飾本であれば中身を読む必要がないのだから、詞書はなくても構わないとも考えられる。しかし、もともとあった詞書をわざわざ削除することもなかったのだから、説明としてそれは十分とは言えないかも知れない。歌と詞書との関係を本質的に、また歴史的に捉え直し、その上で『古今金玉集』『深窓秘抄』の特異な形態の意味を考えることが

さらに求められるであろう。

また歌集の形だけを考えるのではなく、歌そのものを広く、丁寧に読んでゆくことを、論者の研究の一段の飛躍のために期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十七年一月二十二日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。